



トビラの向こう

あんず

消えるトビラ

<http://p.booklog.jp/book/32868>

著者：あんず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kojiro-sasa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32868>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32868>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

はじまりは、いつもの下らないケンカだった。

人間というのは不思議なもので、相手がヒートアップしているのを見ると、なおのこと自分までカッカしてしまう。そういう意味から言えば、優香と直人はとことん合わなかった。

二人とも、頑固で負けず嫌い。しかも謝るなどということはプライドが許さないため、世間一般でよくあるような、時間が経つにつれて何となく元通りに・・・ということは絶望的な確率でしか望めない。

その日も、他人から見たら「えっ？そんなことで？」と驚くようなことが、大喧嘩に発展した。

「もう我慢できない！」

先手を打ったのは、優香である。

先に大声を出した方が優勢になるということを、経験則から学んでいた。だから、直人がひるむような大声を腹の底から振り絞ったのである。

「バカヤロー！デカイ声を出すなよ！」

『デカイ声を出すな』などと言っておきながら、実際には自分の方が遥かに大声を出していることを直人は気づいていない。

普段は冷静沈着が売りの直人だが、曲がったことが大嫌い（自称）なので、いくら彼女がしたこととは言え、目の前で繰り広げられた愚行を見逃す訳にはいかなかった。

事の発端は、こうである。

今朝出掛ける前に、「ねえ、駅前にできたケーキ屋さんで買ってこようと思うんだけど。直人はチーズケーキでいいよね」と優香が言った。

甘いものに目が無い直人は、非常にテンションがあがり、一日中・・・というのは大げさかも知れないが、帰る時間が近づくにつれ、可愛らしい箱に入れられた美味そうなチーズケーキを思い浮かべては、ひとりでニヤついていた。

そんな姿を、会社の女の子達は怪奇な者を見るかのような目で遠巻きに見て、ヒソヒソと話していた。

「遠山さん、何だか今日、恐いんですけど」

何事にも遠慮なしに直球でくるお局的存在の青木さんだけは面を向かって忠告してくれたが、一向に気にならなかった。

ところがー。ここからが大問題なのである。

ウキウキした足取りで帰ってきてみれば、ケーキが一つしか残っていないではないか。

「一体、どういうことなんだよ」

「だって、お腹が空いちゃったんだもん」

優香は少しうなだれて、口を尖らせた。シュンとしているところを見ると、反省はしているらしい。

「普通は一緒に食べるもんだろ？何一人でさっさと食ってるんだよ」

もっとヒートアップしてもいい大問題だが、しおらしい姿を見せられては、どうも調子が出ない。

「だけどさあ、普通先に食うか？だったら、こっそり買ってきて、俺が買える前に一人で食べちゃえば良かったんだよ」

イマイチ腹の虫が治まらない直人は、グチグチと言いつけた。

「んもう、何なのよ」

しつこく言われるのが大嫌いな優香も徐々にヒートアップしてきた。

「はぁ？！お前が言うか？」

悪いのは優香だという部分は譲れないので、こんな逆切れで形勢逆転されてはたまらない。

直人が段々とイライラしてきたのを見て、優香はこれみよがしにハーツと溜息をついた。

「大体お前はいつもそうなんだよ！」

「いつもって何ですか？具体的に言って下さい」

その言葉にカーッと頭に血が上った直人は、「もういらねーよ！」と言いながら、ドンと勢い良くテーブルを叩いて立ち上がった。

その後は、そこまで言うかという言葉のオンパレードの応酬となり、結局最後はいつもの通り大声合戦となっていた。

ドアの向こう

二人の喧嘩は、終盤に差し掛かると、物の投げあいが始まった。

喧嘩自体は珍しいことではないので、二人ともちゃんと心得ていて、投げたら壊れるようなものには手を出さない。

「あっ、それ旅行の思い出だろーが」

「そっちだって、私の枕投げたじゃない」

体に当たって負傷する恐れはないが、心の怪我の方がよっぽど心配である。

優香はクッションやタオルを投げつけられながらしばらく考え込んでいたが、ふと顔を上げて、含みをもたせた表情でゆっくりと立ち上がった。

「あっ、お前なにするつもりだ！」

鈍感な直人でも、流石に分かる。だてに3年も付き合っては居ない。

優香がああいう表情をするのは、決まって人の傷口に塩をぬりこむような酷い仕打ちを思いついた時なのである。

「そっちがその気なら、分かった」

やけに冷静な口調がまた恐ろしい。

目は完全に据わっているのだから、ここで思いとどまってくれるかも知れないという淡い期待は持たないほうが懸命だ。それよりも、どうやって自力で回避しようか頭をフル回転させたが、良い案が思い浮かばない。

「おい、一体何するー」

言い終わらないうちに全てを悟った直人は、絶句した。

「やめろよ！やめろって」

今までこんな非常なことをする女を見たことがあるだろうか。まさかそれが自分の彼女だなんて。

「投げつけてきたものは、全ていないものとみなします」

じゃあ自分のは？という言葉がグッとのみこんで、優香の次の行動を見守った。

本気で止めようと思ったなら力づくで押さえつけるなり、いくらでも方法があるだろうと思われるかも知れないが、正直なところ直人もそれが秘かに気になっていた。

優香が少しだけドアを開けた部屋は真っ暗で何も見えない。その中に、どんどん思い出の品な日用品などを投げ入れていった。

1. 5 畳の闇

「暗くて見えないね。どうなっているのかなあ」

散々投げ込んで気が済んだのか、優香の興味は既にそのドアの向こうに集中していた。

「その部屋は見ない約束だろ」

「だって気になるじゃない。それに、この部屋を収納として使えれば、もっと広々と生活できると思うのよね」
確かに一理あるが、それだけは人としてやってはいけないことだ。

不動産屋は、繰り返し『気になっても、決して開けないように』と念を押した。

「いいですか？家賃を相場より3万も安くしているのは、使えない部屋があるからなんですからね」

「中に怖いものがあるとか、そういった類の話ではないですよね」

安いからといって、借りた後に犯罪が行われた部屋だったり等の不都合な事実が分かっても困る。契約を躊躇ったが、不動産屋は豪快に笑った。

「その手の話じゃあ、ありません」

あまりにきっぱりと否定するので、何の根拠もないのに、すっかり信じてしまった次第である。

それからは、見るのが怖いということもあったが、何となくその部屋的话题を二人とも避けてきた。だが今日は、喧嘩をしたせいで変な勢いがついていたので、例え怖いものが出てきても立ち向かえるという気さえしていたのである。

「もう遅いよ。開けちゃったもん。中は見てないけど」

少しだけ開かれた隙間からは何も見えない。

そもそも、1. 5 畳の部屋に何が置けるかと言えば、何も置けないが正解だろう。

「1. 5 畳なんてさ、押入れと変わらないんじゃないの？大した秘密なんてないんだってば」

言いながら、少しずつドアの隙間を広げていく。

直人はゴクッと唾をのみこんだ。

「あれえ？」

大分開いたドアの向こうを覗き込んだ優香が気の抜けた声を出した。

「ないよ」

「何が？」

「さっき投げ込んだもの」

ドアを前回にしてみたが、日の光りが当たらない部屋なので、中の様子までは分からなかった。

「電気、どこかな」

入り口付近を手探りで探すと、カチッと音がして、ようやく部屋の全貌が明らかになった。

「やっぱり、ないや」

パッと見た印象は、あまりにも普通の部屋だった。

ただし、投げ入れた物がきれいさっぱり消えてしまったということ以外では・・・。

直人と優香は顔を見合わせた。

喧嘩している場合ではない。自分たちの住処にこんな不思議な空間があったとは。

「どこにいったんだと思う？」

言いながら、優香はブルッと体を震わせた。

「どこって言ってもなあ。こんなバカな話、ある訳ないよな」

「でも実際、目の前で起きてるじゃないの」

「まあ、そう言われればそうなんだけど」

歯切れの悪い直人をよそに、優香は部屋の隅々までチェックし始めた。

「こういう不気味なことはさ、原因を解明しておかないとダメなんだよ」

何が駄目なのかさっぱり分からないが、つまりは優香が恐怖を抱えたまま生活していけないということなのだろう。

「しかし、何もないな。ボロい箱以外には」

「ホントに」

すると突然、コンコンとコンクリートの壁を叩く音が聞こえた。

初めは軽く叩く感じだったが、次第に音は拳で叩いているのなら骨がどうにかなるんじゃないかと思うほどの音に変わった。

「ちょっと、何なの？」

優香は怖がって、音のする方向を見ながら後退りした。

二人が息を殺して気配を察知されないようにしていても、音の止む気配はなかった。

音は更に大きくなっていき、とうとう直人は耐え切れずに壁をコンコンと叩き返した。

「やっぱり、いたんですね」

壁の奥から聞こえていた音は止み、不気味な声が聞こえた。

「ちょっと、そこの箱のふたを開けてくれませんか」

直人がチラリと目をやると、優香が青ざめた顔で何度も首を横に振った。

「それは駄目です。そもそも、この部屋には本当は入っちゃいけないことになっているし」

言い訳がましく理由を述べたが、既に入ってしまった以上、説得力に欠けることは否めない。

「お願いしますよ。こっちだって死活問題なんです」

懇願するように言うので少しだけ心が揺らいだが、得体の知れない何かを想像してゾッと鳥肌が立った。

一体何が話しかけてきているのか。人間なのか？いや、それはない。人間だとしたら、壁の向こうのどこから話しかけてくるのか。

直人たちが引っ越してから1年。その間ずっとそこに居たなどと想像するのは、さすがに無理がある。

「あれ？どうしました？まさか見捨てて行ってしまうつもりじゃあないでしょうね」

背中を向けて部屋を出かけた瞬間だった二人は、ギクッとして箱の方を振り返った。

「仕方がない。それじゃあ、とっておきのことを今から話しましょう。ちゃんと聞いてくださいよ」

二人はすぐに逃げられるようにとドアのすぐ手前に立ち、その話に耳を傾けた。

消えたものの行方

「はぁ〜。ようやく話し合う体制が整いましたね。もう少し早く協力してくれれば良いものを・・・」

まるで、二人が話すのを邪魔していたような物言いである。

先ほどまで直人の隣で小さくなって震えていた優香は、静かに怒っていた。それでも部屋を出て行こうとしないのは、話の内容が気になるからなのだろうか。

「実はね。この部屋は別の時間と繋がっているんです」

「別の時間？」

「そうです。先ほどあなたが投げつけてきたものは、全部あちらの時間に放り込んでしまいましたよ」

直人はムッとして、壁をにらみつけた。

「どうして、そんなことをするんだよ」

「だって、あなた達、ちっとも物を大切にしないじゃないですか。無くなって初めて気づくなんて愚かってもんです」

それから不気味な声は、グチグチと二人に説教し始めた。

「あのさぁ、そんなことより俺たちの物、とっとと返してくれない」

「そこなんです」

不気味な声のトーンが少し落ちたような気がした。

「返したいのは、やまやまなんです。でもできないんです」

「どうしてよ」

ずっと黙って聞いていた優香が、不満そうに言った。

「それはね、扉の役割を果たしている部分が閉まっているからなんですよ」

二人は同時に箱に寄せられたフタに目をやった。

『あれだよね？』

『あれだな』

二人は目配せした。

「どうでしょう。更にとっておきの話をしますから、そこを開けていただけないでしょうか」

二人は無言でドアのノブに手をかけた。

どうせまた説教を長々と聞かされるのだ。

「あっ、ちょっと！次が一番大事なんです！」

焦る声を背に、少しのためらいもなくドアをボタンと締めた。

閉ざされた出口

部屋から出た二人は、眩しくて目を細めた。

元々日当たりのいい部屋で、あの一室だけが日の光の届かない薄暗い隅の方に存在していた。

「不気味な声だったねぇ。あの続きってなんだったんだろう」

そう言いながら、優香は首を傾げた。

「どうせ、大したことじゃないさ。それよりも、あの扉、もう二度と開けたら駄目だからな」

「うん、分かってる」

その頃、あの薄暗い部屋の中では、不気味な声が一人でブツブツと何やら呟いていた。

「いやー、失敗したな。まさか途中で行ってしまうとは」

まだ諦めきれないのか、途中何度かコンコンとコンクリートの壁をならしたが、もちろん二人の耳には届かなかった

。

「こんなことになるなら、初めから正体を明かして『助けてください』って言えばよかったよ」

もちろん、そうしなかったのには理由があった。これまた、非常に下らない理由なのだが。

「最後にバーンと『実は、未来から来たお前です』って言ったら驚いただろうな。見たかったなー」

そこで声の主は、ハッと気付いた。

「そうだ。どうしよう……。これでまた出るチャンスを逃したぞ」

キッチンで昼ごはんの用意をしていた優香は、ふと手を止めて言った。

「あの人、違う時間から来たって言ったでしょう？何年から来たのかな。誰だったんだろう」

「どうせ知らない奴さ。それよりも、勝手に人の家にルートを作るなんて最悪だよな」

薄暗い部屋にチラッと目をやり、何事もなかったかのように新聞を読み始めた。

時は2011年10月。

3年後の2014年に、直人は忽然と姿を消すことになる。

これから待ち受ける運命も知らず、自らの脱出するチャンスをみすみす逃した直人は、呑気に大きなあくびをした。